



思文閣出版
6500円＋税

『近代日本における 「絵画の変」 —洋画の流行から デザインの導入まで—』

著・並木誠士

並木誠士氏は、桃山・江戸絵画の専門家でありながら、京都工芸繊維大学の豊かな近代の資料群に向き合い、美術工芸資料館で展覧会を重ねながら教育研究を展開して、本書を著された。現場でモノに接する教育力に、感銘をうけてきた。

1900年のパリ万国博覧会で、化学者の中澤岩太と著名な洋画家である浅井忠が出会い、02年の京都高等工芸学校（のちの京都工芸繊維大学）の開校に至る。

浅井忠がパリで学んだのは、アール・ヌーボー、装飾的なデザインの世界であった。パリで流行していた、尾形光琳などの絵画と工芸が連関した江戸前期の琳派が、日本に逆輸入される。

浅井忠を通じて絵画の近代を語る営みには、説得力がある。浅井は、明治維新

「京都の浅井忠」が主人公

後、工部美術学校でフォンターネーシに古典的な洋画を習った。フォンターネーシの帰国する1878年にフェノロサがアメリカから来日し、「日本美術」を発見し、伝統保存とともに日本画が支配的となる。

1893年には黒田清輝が印象派の光と色彩の世界をフランスから持ち帰る。そして浅井が1900年にパリで出会うデザインが、京都高等工芸学校図案科という場を得て根づくのである。

本書では、19世紀から20世紀への京都における「絵画の変」を、東京を相対化して論じる。

京都では友禅染や西陣織、京焼に絵のような「意匠」を施す伝統産業があり、それに携わる職人・画家の需要が大きい。1888年、京都府画学校に工芸品への応用画学科が置かれたことから、図案を重んじる京都の土壌がうかがえる。そして博覧会、美術学校といった鑑賞と教育の場も、京都が全国初である。

浅井と京都の洋画、展覧会、美術学校と教科書、裸体画・歴史画・戦争画という主題、写実という知識などの近代の特色が、講義ながらにわかりやすく説かれる。

1911年の浅井の死後に、抽象の世界が始まり、彼がまいたデザインが花開く、消費文化の大衆社会が到来することとなる。

（高木博志・京都大学名誉教授）